

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720083

研究課題名（和文） 東方文化事業と中国人留学生に関する研究 陶晶孫を中心として

研究課題名（英文） A study of the Eastern Cultural Policy and Chinese Students in Japan : Focus on Tao Jingsun

研究代表者

中村 みどり (NAKAMURA Midori)

早稲田大学・国際教養学院・助手

研究者番号：30434351

研究成果の概要（和文）：

一次資料に基づき、外務省の東方文化事業に陶晶孫が関わってゆく過程、すなわち彼が日本留学時代に「特選留学生」に選抜されてから帰国後に上海自然科学研究所へ入所するまでのルートとその背景を明らかにすることができた。また戦前の中国人留学生たちの帰国後のネットワーク、およびその後の形跡を辿ることにより、陶が戦後国民政府から台湾帝国大学の接收に派遣されるまでの背景を考察し、陶晶孫研究に新たな視点を与えるに至った。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to describe Tao Jingsun's involvement of the Eastern Cultural Policy based on historical documents. The network of Chinese returnees and their career in China were used to trace down Tao's activities. His work dated from the time when he was a special scholarship student selected by Ministry of Foreign Affairs in Japan to the time when he worked at the Shanghai Science Institute. In addition, It came clear that Tao was sent to Taiwan to requisition Taiwan Imperial University after World War II. This paper extends the existing literature by giving a new perspective to Tao Jingsun's study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	300,000	0	300,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	210,000	1,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：

東方文化事業、陶晶孫、中国人日本留学生、特選留学生、上海自然科学研究所、東南医学院、中国文学

1. 研究開始当初の背景

日中戦争以前・戦時中の中国人日本留学生に関する研究は、大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）、阿部洋著『「対支文化事業」の研究』（汲古書店、2004年）を中心として、外務省の東方文化事業を含めた対中国文化・教育政策の変遷と留学生の動向が明らかにされてきた。しかしながら、その成果を踏まえて、これらの政策が留学生一個人に与えた影響について取り上げた研究はあまりない。中国近代文学の担い手の多くも、日清戦争後から日中戦争前夜に日本に渡った留学経験者であった。だが、従来の文学研究でも上記の留学政策という視点から文学者たちの作品と生涯に焦点を当てた研究は限られている。

研究代表者が研究対象としてきた創造社の作家・陶晶孫（1897-1952）の経歴は、まさに東方文化事業の対中国文化・留学生政策と密接に関わっている。だが、今日までその詳細が問われることはなかった。しかしながら、日中間の文化摩擦が激化する時代、その狭間で生きた陶のような元日本留学生の作品と生涯は、政治的な背景をも視野に入れた留学生研究と文学研究の双方からアプローチしなければ、見えてこない面も多いと思われる。このため、東方文化事業と陶の関わりを明らかにし、また同事業が中国人日本留学生のその後に与えた影響について考察するため、本課題を設定した。

2. 研究の目的

創造社の作家・医学者として知られる陶晶孫に関する考察は、主に文学研究の分野において進められ、彼の文芸活動および文学作品に焦点を当てたものが多い。しかしながら、1897年に来日して九州帝国大学・東北帝国大学で医学、理学を学び、1929年に中国に帰国した彼の経歴に目を向けると、1920年代初頭から本格的に着手された外務省の東方文化事業と密接に関わっていることに気

づく。

阿部洋氏著『「対支文化事業」の研究』（汲古書店、2004年）に収録された中華学会の史料からは、1927年の時点で陶が東方文化事業の学費補給制度の「特選留学生」に選抜されたことが窺える。この「特選留学生」の肩書きは、同様に東方文化事業の対中国政策の一つとして設立された上海自然科学研究所に陶が研究員として1931年に入所したと結びつく。しかしながら、「特選留学生」から「上海自然科学研究所所員」に至るまでの背景については、十分な検証がなされていない。現時点では、佐伯修『上海自然科学研究所 科学者たちの日中戦争』（宝島社、1995年）がもっとも詳細に同研究所と陶の関わりを記した書籍であろうと思われる。陶は帰国後、情熱の対象を左翼文芸運動から公共衛生学へと移し、上海自然科学研究所への入所に至っている。この思想的な変遷の背景を調べることは、留学生たちの帰国後の選択やネットワークを考察する上でも欠かせないと考えられる。

以上のことから、中国においても歴史史料の公開が進む今日、本研究では、史料に基づいて東方文化事業に陶をはじめとする元中国人日本留学生が組み込まれてゆく過程をたどり、同時に同事業が留学生に与えた影響について考察したい。

3. 研究の方法

（1）平成19年度

主に日本国内で資料調査を行い、早稲田大学中央図書館、国会図書館、外交資料館に所蔵されている東方文化事業、同事業の一環として設立された上海自然科学研究所、同事業の支援を受けていた医学団体・同仁会に関する資料の収集を行った。

具体的には、外務省外交史料館所蔵の外務省記録・東方文化事業関連史料、同仁会の刊行物と機関誌『同仁』、上海自然科学研究所刊

行物などを調査した。各機関・制度の輪郭を明らかにするとともに、それらの刊行物に陶が発表した文章を精読し、各機関・制度と関わった彼の活動およびその社会、政治的背景について考察した。

(2) 平成 20 年度

日本国内と中国で資料調査を行った。

国内では、陶の出身校である九州大学（元九州帝大）の中央図書館・医学部図書館で大学要覧など大学史料を閲覧し、陶が在籍した当時の九州大学医学部の状況、同大学で陶と同時期に学んだ中国人留学生の状況、陶が参加したオーケストラ活動について調べた。国会図書館では、上海自然科学研究所の所内倶楽部文芸部の機関誌『自然』の誌面を調査し、陶が発表した文章を精読した。日中戦争前と戦時の日中研究員の動向、同研究所における陶の立場とその社会、政治的背景について考察した。

中国では、北京社会科学院の書庫で陶が帰国後寄稿した上海の文芸誌『楽群』を閲覧し、また同科学院研究員から北京の学术界における陶晶孫研究の動向を伺った。上海市档案馆では、上海自然科学研究所と帰国後陶が教壇に立った東南医学院に関する国民政府関連の史料を閲覧した。また上海図書館で、東南医学院の刊行物、戦時中に刊行された陶晶孫の散文集『牛骨集』、日本支配下の戦時上海で刊行された文芸誌『光化』、『文帖』、『文芸世紀』、『文芸月報』などの誌面を調査し、陶をはじめとする当時上海に留まった中国知識人の文章を精読した。

そのほか、上海の左連記念館と元上海自然科学研究所の建物を見学し、元同研究所中国人研究員の遺族の方に面会し、当時の話を伺った。

これらの調査を通して、上海自然科学研究所と東南医学院の運営状況、同大学と陶の関わり、戦前・戦時の陶の作品と活動について考察した。

(3) 平成 21 年度

日本国内と中国で資料調査を行った。

日本では早稲田大学中央図書館で、東方文化事業の支援下にあった留学生支援団体・日華学会の機関誌『日華学報』、その他の刊行物を調査した。

北京の国家図書館では、日本支配下の戦時上海で刊行された新聞『申報』などの誌面調査を行い、陶を代表とする当時上海に留まった中国知識人の文章を精読した。また上海図書館で、日本支配下の戦時上海で設立した日中文化協会上海分会の機関誌『文協』などの

誌面を調べ、陶が発表した文章を精読した。東南医学院を前身とする安徽医科大学の档案馆では、東南医学院の同窓会雑誌『校声』など戦前の同大学刊行物を調べ、陶が発表した文章を収集、精読した。

これらの調査を通して、東南医学院、日中文化協会上海分会の運営状況と陶の関わり、戦時の陶の作品と活動について考察した。

4. 研究成果

【主な成果】

従来不明であった陶晶孫の東方文化事業との関わり、すなわち、日本留学時代に「特選留学生」に選抜され、上海自然科学研究所に入所するまでの背景を一次資料を通して明らかにすることができた。その結果、彼が日中戦争前夜まで東南医学院と上海自然科学研究所、そして同仁会との重要なパイプ役を果たしていたことなどが明らかになった。同時に史料から、「特選留学生」を含めた中国人日本留学生たちの中国帰国後の形跡とネットワークを知ることにより、陶が戦後国民政府の接收作業に加わり、台湾に派遣されるまでの背景を考察し得るに至った。また『陶晶孫選集』（人民文学出版社、1995年）に未収録の陶の多分野にわたる文章に目を通すことにより、彼の戦前・戦中・戦時にまたがった文学観を鳥瞰することが可能となった。

【国内外における位置づけ】

日本では、伊藤虎丸氏を中心とした創造社研究のなかで陶晶孫研究も地道に続けられてきた。今日では、彼の左翼文学活動の研究（小谷一郎「一枚の写真から 帰国前の陶晶孫、陶晶孫と人形劇のことなど」『中国文化』第59号、2001年など）のほかに、大正昭和モダニズム文学の視点から陶の作品を評価しなおす動きが盛んである（中西康代「陶晶孫初期作品集『音楽会小曲』と新感覚派に関する一考察」（『東京女子大学 日本文学』第82号、1995年）、小崎太一「陶晶孫による日本モダニズム文学の持ち込み」『現代中国』第79号、2005年など）。

一方、戦後中国においては、社会主義国家の建設に携わることがなかった陶晶孫は親日派と見なされ、否定的な評価が与えられてきた。1980年代に名誉回復を果たしたものの、彼に関する研究は、他の創造社の作家と比べると極めて限られていた。しかしながら、ここ数年中国でも陶晶孫の著書二冊（曹亜輝他訳『給日本的遺書』上海文芸出版社、2008

年、『陶晶孫代表作 楓林橋日記』華夏出版社、2009年）が新たに刊行され、創造社の文学や日中の文学交流を論じる際、彼の文学が言及されることも徐々に増えている。

巖安生氏の日本語の著書『陶晶孫 その数奇な生涯 もう一つの中国人留学精神史』（岩波書店、2009年）が上梓され、価値観が多様化する今日、「越境者」として陶晶孫の作品は以前よりも注目されつつあるといえる。このような流れのなかで、本研究は視点を変えて、陶晶孫の東方文化事業への関わりに焦点を当て、一次史料に基づいて、戦前・戦中の日中の文化摩擦が激化する時代にその狭間で生きた陶の帰国後の形跡とその背景を明らかにした。陶が生きた時代の政治・社会的背景を踏まえることにより、彼の作品と活動はより多面的に眺めることが可能となり、また留学生研究の分野に対しても、新しい視点を提供し得る。

【今後の展望】

以上の成果を踏まえて、現在、東方文化事業と陶の関わりについてまとめた研究論文を執筆中であり、今年度中に日中の研究雑誌への投稿を予定している。また従来の陶の年譜と著訳作品目録（『陶晶孫百歳誕辰記念集』〔百家出版社、1998年〕収録）を補筆、改正したものを発表する予定である。今後も巖安生氏をはじめとする日中の陶晶孫研究者と連絡を取り合い、陶晶孫研究における日中の学术交流をはかりたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

（1）

中村みどり

「陶晶孫のプロレタリア文学作品の翻訳（続）人形座、築地小劇場との関わり-」

『中国文学研究』、査読有、第35号

早稲田大学中国文学会

2009年12月1日、63-77頁

（2）

中村みどり

「七理重恵と中国歌謡 『同仁』を中心として-」

『中国民話の会通信』査読無、第89号

中国民話の会

2009年7月1日、2-10頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村みどり (NAKAMURA Midori)

早稲田大学・国際教養学院・助手

研究者番号：30434351